

# イギリスの文学教育(1)

— 詩教育を中心に —

山元隆春

(広島大学大学院)

## はじめに

本稿では、イギリスの中等学校用国語教科書 Study English<1~5> (①、以下SEと略す)と Mainstream English<1~5 & Olevel> (②、以下MEと略す)とをとりあげ、これらの教科書に収められている詩教材をおもな考察の対象に据えながら、イギリスの中等学校における詩教材の扱われ方の一端に触れ、イギリスの中等学校における詩教育の特色をとらえたい。

### 1. 教科書単元のなかでの詩教材の位置

ここでとりあげたふたつの教科書は、ともに単元によって構成され、各々の詩教材も単元ごとのテーマに従って配列されている。両教科書の詩教材の数は<表1><表2>のとおりである。

各々の教科書単元は、いわゆるジャンル単元ではなくテーマ単元のかたちをとっているため、詩教材を全く含まない単元の数は少なくなっている。単元によっては詩教材の数が他の単元と比して多くなっているも

<表1: SEの詩教材数> <表2: MEの詩教材数>

段 段	1	2	3	4	5
単元1	1	0	1	5	0
単元2	4	2	0	4	0
単元3	2	1	0	1	1
単元4	0	2	0	1	3
単元5	2	1	1	0	0
単元6	2	2	0	6	1
単元7	0	1	3	1	0
単元8	5	2	2	1	2
単元9	0	1	0	5	2
単元10	—	1	1	2	0
単元11	—	—	1	—	0
単元12	—	—	4	—	—
単元13	—	—	1	—	—
単元14	—	—	1	—	—
単元15	—	—	3	—	—

段 階	1	2	3	4	5	0
単元1	3	0	2	3	0	0
単元2	2	1	0	2	0	2
単元3	1	9	0	0	0	1
単元4	0	1	0	2	0	0
単元5	3	0	1	0	0	2
単元6	1	1	2	8	3	0
単元7	3	4	4	0	3	1
単元8	0	1	4	0	0	3
単元9	0	0	0	0	0	2
単元10	—	0	3	2	6	5
単元11	—	—	2	0	5	—
単元12	—	—	—	2	0	—
単元13	—	—	—	—	3	—

のもある。たとえば詩教材を5つ以上含む単元は、SEの第1段階単元8「動物と人間」、第4段階単元1「いなかの生活」単元6「ひとからひとへ」単元9「スポーツ」、MEの第2段階単元3「人魚と海の伝説」、第4段階単元6「いなかのノートブック」、第5段階単元10「現代」単元11「声」、0レベル段階単元10「人のための人」、である。動物、自然、自然のなかでの人間の営み、などに関する単元にとくに多くの詩教材が配されていることがわかる。また、MEの第2段階単元7は「詩人は語る」と題され、4編の詩をとりあげてそれらを深く味わうような構成がとられている。詩教材の数が少ない単元にあっても、たとえばSEの第1段階単元1「はじめての時のために」の冒頭に配された詩はその単元の導入としての役割を担われ、同じく第4段階単元7「都市の風景」のなかでも「失業者」と題する詩がとりあげられて、都市生活の一面を考えさせるような配慮が成されており、各単元の文脈のなかに詩教材が巧みにとりこまれていることがわかる。

両教科書に採択されている詩教材は多岐にわたる。たとえば、テニスン、ワーズワース、イェイツ、ロレンスなどわが国にも紹介されているイギリスの詩人の詩ばかりではなく、カール・サンドバーグ、ホイットマン、ラングストン・ヒューズといったアメリカの詩人の詩や、フランスのジャック・プリヴェールの詩などもとりあげられている。また、エスキモーの歌、スワヒリの伝承歌謡、さらには日本の短歌・俳句、蘇東坡の詩などの英訳まで収められている。

また、一文字一文字をある形に配列することによって視覚的な効果をねらった詩や、痛烈な文明批評を含んだ諷刺的な詩なども採択されている。さらに、SEの第4段階単元6にザ・ビートルズの歌詞が採られているということも注目すべきことである。

このような詩教材の多様さを、イギリスの中等学校における詩教育の特徴のひとつとして数えることができるであろう。

両教科書に採択されている詩人ののべ人数は、SEで64人、MEで87人ときわめて多い。これらのなか

には、先にも述べたように単にイギリスの詩人とどまらずさまざまな国の詩人が含まれている。特に同じ英語圏であるアメリカの詩人の多さは目をひく。特に採択されている詩の数が多いのは、ハーディ、イェイツ、ロレンス、シーマス・ヒーニー、テッド・ヒューズといったイギリスの近・現代の詩人たちで、この両教科書のばあい19世紀以前の詩人たちの詩よりもむしろ今世紀の詩人たちの詩が占める割合が大きいのである。

## 2. 詩独自の表現法とその効果の把握

SE所収の詩教材末尾に付されている〈学習課題〉にはそれぞれ小見出しがつけられている。それらのうち主なものは〈討論〉〈理解〉〈解釈〉〈書くことへの示唆〉〈ことばの研究〉〈劇〉〈発展〉〈追究〉〈図書館活動〉などがある。これらの小見出しは主に学習の形態を表したものであり、そのなかにはさらに数個の項目に分けられている。ここではこれらの〈学習課題〉のなかで①どういった詩独自の表現法とその効果をとらえさせようとしているのか、②それらについてどのような学習活動をさせようとしているのか、ということを探っていきたい。

### ①詩独自の表現法とその効果の把握の諸相

SE第2段階単元8のなかの「もしもきみがボタンを押したら」(タカギキョウゾウ)の〈学習課題〉のひとつは、「詩のかたちに注目しなさい。各連の第1行を短くしていくことによってこの詩人はどのような効果をあげていますか。」というものである。また、第3段階単元7には「次のページのクリストファ・ロウグの断片はなぜ『壺』と題されているのでしょうか。(ヒント：かたちに注意)」といった問いがみられる。これらのなかでは、詩の形式の持つ視覚的な機能がふまえられていると言えるだろう。

第1段階単元6ではオーデンの「獲物」を〈討論〉するために次のような課題が設けられている。

「1. 各連を『0』で始めることによって、この作者はどのような効果を挙げていますか。また、他にどのような語が繰り返し用いられていますか。」

2. 詩行の長さや動きの速さ——詩のリズム——に注目しなさい。軍人たちが家に近づく時のドラムの音やその動きをこの詩人はどのようにとらえていますか。

3. 詩は必ずしも韻を踏まないでいいのですが、この詩人は各連の1行目と3行目、2行目と4行目が各各韻を踏むようにしています。これらの押韻はあなたが詩を楽しむ上で助けになりましたか。(①、p.116)ここでは、詩のなかの〈繰り返し〉〈リズム〉〈押韻〉が読者にもたらす効果について問われている。先に掲げたものとは対照的に、詩の機能のなかの読者の聴

覚に訴える側面がとらえられているのである。

第3段階単元5においては、スペンダーの「急行列車」について〈ことばの研究〉という課題が設けられ、特に比喩の用法や機能が問われている。「『女王のように滑りながら』というのは『直喩』と呼ばれる言語形式です。本書末尾の用語解説で直喩の定義を調べなさい。さらにこの詩のおわりの10行のなかから他に2つの直喩を見つけなさい。」といった設問のように直喩に関するものや、あるいは直喩・きまり文句・隠喩の区別をさせる問いが設けられている。さらに第5段階単元6では「下に掲げたアイロニーの定義を考えなさい。(中略)ここでエイドリアン・ヘンリの詩を詳しく読み返してアイロニーの例を示しなさい。」といった、詩の語りの持つ機能を問う設問も設けられている。

以上のように、SEの〈学習課題〉のなかでは、詩の形式・音韻の持つ表現効果、比喩の機能、語りの持つ機能などが押えられているのである。

### ②学習活動の諸相

これらの〈学習課題〉のなかでは、上述した詩の機能の諸局面をふまえた学習活動がさまざまなかたちで求められている。たとえば、討論をおこなうばあいであっても、その詩の内容的側面ばかりでなく、形式や音韻上の問題についても論じるように求められているし、比喩を扱うばあいも、その詩のなかに比喩をみつけるばかりでなく、比喩の種類・定義・用法をさらに詳しく調べるように求められている。

また、ある詩を読んでからそこにみられる特徴的な技法を用いて詩や文章を書いたり、ある観点から詩を要約したり、詩作に関する詩人の文章を読んだのちに詩を書くことなども求められている。また、ある詩を読んでそれを脚色したり、指示に従ってパントマイムをするよう求めるものもある。〈討論〉や〈理解〉のなかで話すことが求められていることと併せて、これらの〈学習課題〉のなかで、表現することの求められる度合は高いと言うことができよう。

さらに、〈図書館活動〉として、スペンダーの「急行列車」との比較のために、シーグフリッド・サスーンの「朝の急行列車」という詩を図書館で採させる課題のあることも興味深い。

## 3. 詩の教材研究と指導法

ここでは、イギリスの中等学校において実際どのように詩を指導していくのかということ、ロレンスの詩「蛇(Snake)」のばあいについて探してみたい。

ロレンスの「蛇」は全体で18連から成り、ある男(おそらく詩人自身)が水飲み場で蛇に出会った時の思いを、内的な独自のかたちで描いたものである。

この詩についてここでとりあげる教材研究例は、レ

スター大学教育学部のマーガレット・メシソン女史によるもの(③、pp.73-84)である。この教材研究例はGCE試験のAレベル(上級レベル)の試験に備える第6学年(日本の高校3年に相当)の生徒たちに対する授業のためのものであり、そこでは教材についてのかなり詳細な分析もおこなわれている。

メシソン女史はまず「教材選択の理由」として次のようなことを述べている。

「わたしはこの詩をそのなじみやすさのゆえに選んだ。すでに出会ったことのある文章を精読するよう求められたばあい、第6学年の生徒は初めて接した文章のばあいよりもはるかに自信を持ってクラス討議に参加する準備をすることだろう。」(③、P.76)

メシソン女史はこのような「なじみやすさ」が、昼間に蛇に出くわすという印象的な題材とあいまって、生徒たちの詩体験をうながすのだとしている。MEの第1段階単元1のなかにこの詩の冒頭部分が採られているところからも、この詩が比較的平易な部類の詩と考えられていることが推測できよう。

この詩を鑑賞していくために3通りの「導入」のしかたが示されている。

1. 生徒の「蛇」という題名に関する連想をひき出し、蛇について経験したことを説明させる。その際生徒間や生徒の内部で葛藤している感情を表現させたり、そういった感情に気づかせたりする。

2. 人間と現実世界、とりわけ動物との関係に対する生徒の姿勢を探ること。

3. われわれが行動のしかたを学んだり、難しい問題を解決していくための方法を論じること——読後のクラス討議を期待するかあるいは生徒たちが詩を自力で調べていくための出発点を与え、それからロレンスの経験についてのクラス討議へと導く。(③、P.78)

これらのうちいずれかひとつの方法を用いて、生徒たちのこの詩に対する構えを作っていくことが求められているわけである。このような「導入」が行われたのち、「詩全体をみんなで読」み、さらに冒頭部分を各自黙読することが求められる。

メシソン女史の教材研究のなかでは、この詩全体が4つの部分に分けられ、各々の部分について教師が発問していく上での留意点が述べられている。ここでは、そのうち特にこの詩の冒頭部分がどのように扱われているかということのみをみていきたい。冒頭部分の訳文は次の通りである。

「ある暑い、暑い日に、うちの水のみ場へ、／一匹の蛇が来た、わたしは暑さのためバジャマのまま、そこへ水を飲みに行った。／深い、妙なおいする、大きなこんもり茂ったイナゴマメの樹のかけ／わたしは

水さしをもって段々を降りたが／待たねばならない、待たねばならない。わたしよりさきにかれが水のみ場へ来ていたから。／かれは暗がり土塚の割れ目からはい下りると／金茶まんだらの柔らかい胴をゆるゆるとひきずり、石の水のみ場のへりをこえ咽喉を石の底にのせて、／まっすぐな口からすすった、／まっすぐな歯ぐきから、そのゆるやかな長い身体にしずかに飲みこむ、／音もなく。／だれかがわたしよりさきに水のみ場にきていた、／それでわたしは、遅れてきた者のように、待っていた。／かれは牛のように、飲むのをやめて頭を上げた。／そして水を飲む牛のように、わたしをぼんやり見つめた。／そして口から二つに裂けた舌をチラチラと出して、一瞬考えていたが、／またかがんで少し飲んだ。／大地の燃える胎内から出た、土のような茶色、土のような金色のやつ、／このシシリイの七月の昼、煙をはくエトナ山」(引用者注：上田和夫氏による訳<④pp.102-4>)。／は行がかわることを、また／は連がかわることを示す。

この部分では授業中の発問について次のような着眼点が述べられている。

(1)「蛇と人間とがともに水を欲しているということにわれわれはどのように気づかせられるか」と問うことによって、この詩の冒頭部分で暑さを表す語が繰り返し用いられていることに注目させること。

(2)「この詩人は蛇が先にこの水のみ場に着いたことをどのように表しているか」と問うことで、生徒たちに蛇の優先権を認識させること。

(3)蛇が擬人化されているということを読みとらせること。すなわち「かれ」「咽喉」「歯ぐき」「口」「考えこむ」「かがむ」といった語が蛇の姿や行動を描くの用に用いられていることに気づかせること。

(4)「わたし」が詩の後半で蛇を人間よりも上位のものにみなしたことを理解するために、「金茶まんだらの胴体」や「ゆるやかな身体」という表現が、蛇の美しさ、威厳、無垢さなどを表したものであることを理解させる必要があること。またそのためにはさらに、蛇の行動に用いられる動詞の選び方や蛇のゆるやかな動きを表す詩行の長さ、さらに「水を飲む牛」のような滑稽な連想などに注目させる必要があること。

これらのうち(1)(2)は、この詩の状況設定の巧みさを生徒たちに認識させることであり、(3)(4)はこの詩のなかで蛇がどのようにとらえられ描かれているかということと併せて、この詩の表現・技法上の特徴を生徒に吟味させることをめざしたものである。これらのなかでは、ロレンスのこの詩のもつ、<繰り返し><詩行の長さ><擬人法><滑稽な連想>などの特徴を把握させていくことがねらわれている。

また、このようなかたちでこの詩の冒頭部分を吟味したのち、「クラスのひとりにこの詩を声に出して読むように求める。」このことは、生徒たちの内面にこの詩のムードを作り上げ、詩のなかのことはや詩の方法のもたらす効果を自覚させるうえで有効なことであると述べられている。

このほか教師が生徒のために行う活動としては、①生徒たちのために発問にもとづいたワークシートを作ってやること、②詩のなかから生徒たちが考えたり説明したりしやすい箇所を選ぶこと、③グループ討議で話し合ったことをもとに、朗読会 (public reading) のための手引きを作らせること、④生徒個々の反応のなかみをとらえるために創造的作文 (creative writing) のための機会を設けること、などが挙げられている。

#### 4. イギリスの中等学校における詩教育の特色

ここまでの考察をふまえて、最後にイギリスの中等学校における詩教育の特色を、おもに教材と指導法を中心にまとめてみたい。

まず、詩教材については次のような特色がみられる。

(1) ふたつの教科書はテーマ単位によって構成され、ほとんど全ての詩教材が単元展開の流れのなかに位置づけられている。

(2) 詩を通じて、イギリスのみならずさまざまな国々の文化・風俗に触れさせるための配慮がなされている。

(3) オソドックスなかたちの詩ばかりでなく、特殊な配列法や表記法で書かれた詩が採られている。アルファベットの一文字一文字で何らかのかたちを型どったような詩や、新聞の大見出しをつなぐことによって作られた詩がこれにあたる。これらは、精密な読みを期待するよりも、むしろ生徒を詩の幅広さに触れさせることをねらった教材だといえる。

(4) 内容の面から見ても、伝統的な抒情詩・叙景詩・叙事詩ばかりでなく、社会的・諷刺的な内容を持つ詩が少くない。このように読み手の認識を揺さぶるような詩が採択されていることは注目に値する。

(5) わが国でも知られているジョン・ダン、ミルトン、シェリーらの古典的な詩人の詩は難解であるためか、全くといっていいほど採択されておらず、ことはや内容の面で生徒たちの関心をひきやすいと考えられる、ロレンス、シーマス・ヒーニー、テッド・ヒューズら現代詩人の詩が多く採択されている。ザ・ビートルズの歌詞が教材となっていることもこの点で興味深い。

以上、2種の教科書を考察するだけでも、イギリスの中等学校における詩の教材は、詩の数・形式・国際性、詩人の数、詩人の時代などいづれの点をとってみ

ても多様なヴァリエーションを持っていることがうかがわれる。

次に詩の指導法については以下のように考察した。

(1) SEの詩教材の末尾に付された学習課題においては、詩独自の表現方法と効果がとらえられ、それぞれの表現方法の持つ機能が十分に発揮されるように学習活動がしくまれている。

(2) 学習課題のなかでは、とくに書くことが重視されている。〈討論〉や〈解釈〉の項においても、やはり書くことが何らかのかたちで取り入れられている。

(3) 詩を読む前の「導入」に十分な時間がさかれ、詩を読むための「下地」を作ることに十分な配慮がなされている。

(4) 授業のなかで、詩を読むにあたっては、教材の内容としての詩人の経験と、読み手としての生徒の経験とを結びつけることがめざされている。

(5) 授業のなかで方法として重視されるのが、「声に出して読むこと」であり、さまざまな形態での「討論」である。そこでは、話し聞くことがことさら重視されている。

(6) 生徒たちの個々の反応の内実をとらえるために創造的的作文を書かせることの重要性が説かれている。これは書くことによる反応の定着とその発展を図ったものである。

これらにおいては、読み・書き・聞く・話す・演じるなどの活動のなかで、生徒自らの想像を通じて実際の経験に近い経験をしていくことがめざされている。また、イギリスの中等国語教育のばあい、そのように生徒の経験を重視した読みがなされる一方で、GCE・CSE試験に備えるための、分析的な読みの指導がなされていることも考慮に入れなければならない。

#### 文 献

①J. R. C. Yalesias & Hazal Hagger, Study English : Stage 1~5, Longman, 1979 ; 1981.

②J. R. C. Yalesias & Hazal Hagger, Main-stream English : Stage : 1~5 & Olevel, Longman, 1974~1984.

③Margaret Mathieson, Teaching Practical Criticism : An Introduction, London / Croom Helm, 1985.

④D. H. ロレンス (上田和夫訳) 『D. H. ロレンス詩集』、彌生書房。

追記：京都教育大学の位藤紀美子氏には、文献①②のほか多くの資料をお貸しいただいた。記して感謝申し上げる次第である。